

幕末に於ける太陽曆

大 矢 眞 一

これまで我が國の太陽曆の歴史を述べる者は、『天文解那物語』の寛政八年の太陽曆、中井履軒の享和元年の華胥曆、山片蟠桃の『夢の代』の享和二年曆等の名を擧げた後直ちに明治の改曆に移るのが普通である。しかし文政以後西洋の文化に接觸することがやうやく繁くなり、世人の眼が海外に向けられることの多くなつて來る時、西洋の曆に關する事柄だけが全く空白であらうとは常識的には考へられないことである。事實この方面に關心を持つてゐた者は決して少くなかつたので、これに關する刊行物も相當あつたもののやうである。今私は最近眼に觸れたその幾つかを此處に掲げてこの種のをなほ他に御存知の方から御教示を得たいと思ふのである。尙ここに記すもの大部分は尾島碩宥、秋岡武次郎の御二方の所蔵にかゝる。貴重な品を快く御見せ下さつた上に種々御指導を賜つた兩先生に厚く御禮を申上げる。

1、歐羅巴曆（もと無題、假に名を附す）本多利明考定 文化三年三月刊

一枚刷 縦一尺一寸五分 横一尺五寸三分（秋岡氏藏）

これは跋に「歐羅巴洲ノ一週歲モ十二個月ナリ、但正月元旦ハ冬至ヨリ十一日或十二日目ナリ。コレ彼第一月ハヤニユアレイ」

ト稱スル新年元日ナリ。コレ我十一月月中旬ヨリ十二月初ノ内ニタル。冬至ノ遲速ニヨリテ其候ヲ異ニス。故ニ四季我時候ト大ニ異ニスルナリ。……翻譯家彼春秋月ヲ譯シテ直ニ二月三月トイフトキハ我二月ニアラズ、ココヲ以テ毎ニ大ニ其實ヲ誤ル、宜クコレト參考シテ月名ニハ拘ラズシテ其氣候ヲ配當シ、某月ハ我曆暨春分ノ候ナリ云云ノコトヲ辨認スベシ。……」とあるやうに全く西洋の事情を知る一つの手段として作られたものである。この曆は閏年後第一年（我國丑巳酉年）に用ふる表、閏後第二年（寅午戌）、閏後第三年（卯未亥）、閏年（子辰申）に用ふる表の四表からなり、その各表は第一月から第十二月までの十二段とする。そして例へばその第一表第一段は「第一月 Tanini. ヤニユアレイ 三十一日。去年冬至次日距 十一日目西土第一月元日。五日我が小寒、二十日大寒ノ候ニ當ル」の如く記されてゐる。この表によれば彼の國の何月が我が國の如何なる氣節に當つてゐるが分る。若し又、當年の我が國の曆があれば、彼の國の何月何日は我が國の何月何日に相當するか、及びその道の計算も可能であつて、この曆では表の次にこの換算法が述べられてゐる。勿論これは一兩日の相違は止むを得ないのであつて、利明

もその點は跋の中で認めてゐるやうである。

これをやや形を變へて複製したのが、次の

二、西洋萬代曆 文化四年刊

一枚刷 縦一尺二寸 横一尺六寸

伊勢 山形屋傳右衛門版（尾島氏藏）

である。この複製の事情は跋に「右西洋曆江戸本多先生所撰也。

去歲肅夫復祇役至江戸、就先生問天文、既而先生授以此曆、肅夫歸惠余、余所未前聞之書也、喜可知、且爲肅夫之惠、故上木以分同好云。文化四年丁卯春 洞津 國南越村深藏子虛錄」とあるによつて明かである。

これがもう少し幕末に近くと西洋曆の必要は彼の國の事情を知る爲といふよりはもつと切實の問題となつて来る。そしてそれを最も痛感したのは幕府自體であつて、ここに半ば公的な萬國普通曆なるものが刊行せられることとなつた。

三、萬國普通曆 安政三年創刊、美濃判冊子

これは毎年發行されたもので、安政三、四、五の三年分三冊は流布が廣く、個人或は圖書館等に收藏されてゐるものが相當に多い。しかし此の後も續刊されたものであることは、秋岡氏所藏に安政七年、慶應三年のものがあることから分る。安政三年の分は司天官澁川景祐編で、四平以降は同佐賢編、慶應二年の分は澁川敬典編である。尙慶應のものには型が小さくなつて中判楨本になつてゐる。

安政三年の序文（附言と記す）には「此書タルヤ、官曆數ヲ以テ、毎歲發下シ賜フ一暗厄里亞ニ航海曆ト比較シ、其當否ヲ試シガ

幕末に於ける太陰曆（大矢）

爲メニ設ル所ナリ。蓋吾ガ年月日時ハ固ヨリ彼ト大ニ異ナルト雖ドモ俱ニ戴ク所ノ天ハ同一體ナリ。故ニ共ニ所視ノ七曜所在モ亦殊ナル莫シ。因テ此彼七曜測算諸數ヲ用テ、兩地相距里差時分ニ循ヒ、此ヲ照考スルトキハ、日時亦互ニ相通ズルヲ得。云云」と記されてゐるが、英國の航海曆は此の後最近まで我が國の曆の基本となつてゐたことは周知の如くである。

本曆の本文は、我が國、西洋、魯西亞の月日を對照したもので、上段には、我が國の曆の一月一日から十二月三十日までの毎日を並べ、第二段には之に對する西洋の月日、第三段には魯西亞の月日を配し、その各に曜日、月の朔望、上下弦、氣節其他を記して居り、卷末にはその年の日月食の時刻と食分を我が國と西洋とを對照して載せてゐる。

本曆の發刊は我が國太陽曆の歴史上重要な意義を持つものであるが、一たびこれが刊行されると、これを基とした略曆の類が續々と現れて來た。例へば次の數種の如きものである。

四、安政四年西洋曆 一枚刷 縦五寸六分五 横八寸二分（尾島氏藏）

はじめに「達通館配合西洋曆」とあり、末に「購所黒田勘盧算定」とあり、上部には「ALMANAK VAN TATOKWAN TE」の文字を記す。本文は上下二欄に分ち、上欄には安政四年の、我が國の各月の大小、朔日の干支、節氣を載せ、下欄はその各月の朔日が西洋曆の何月何日何曜日に當るかを記す。終りに同年の雜節の月日、日蝕等が掲げられてゐる。要するにこれは舊來の略曆に一部西洋曆の要素を加へたものである。

5、西洋略曆（安政四年）一枚刷・縦七寸七分 横六寸四分
分 松濤軒梓（秋岡氏藏）

January から December まで紙面を縦に十二行に分け、各行を又縦に二分して西洋曆の月日と我が國の曆の月日とを左右に對照させたものであつて、洋曆の日はアラビヤ數字を用ひ黒色に刷り、我が國の分は漢數字を赤色に刷つてゐる。これは西洋曆が中心で、それに我が國の月日を附するといふやり方である。

6、皇西通曆（文久二年）小型折本一册 續田理軒（秋岡氏藏）

表紙裏には文久和蘭通曆と記す。上段に黒字で我が國の月日、節氣等を並べ、下段に白抜字で西洋の月日を對照する。一段は六日即ち甲子一巡する迄を並べ、全部で七段。同じ和洋曆對照でもこれはうと異つた我國の曆が中心で、従前には歲德、金神等の如きものも記し、月日の欄の最下には十方タレ、天一天上等をも載せてゐる。

7、文久三年癸亥略曆 一枚刷 縦五寸二分 横五寸七分（筆

者藏）

これは刊行者名もなく、普通の略曆に近いものであるが、その各月の大小、朔日の干支を記した欄には、その朔日に相當する西洋の月日が右側に赤字で、ロシヤの月日が左側に青字で掲げられてゐる。又最下の欄には西洋（赤字）ロシヤ（青字）の各月の一日の曜日とそれが我が國の何月何日に當るかを記してゐる。4と類似してゐるが、時代が後だけに余程進歩した形になつてゐる。

このやうな種類の曆は、一枚刷のものだけに圖書館等に收藏されることが少く、個人の所有となつてゐるものが多いために、今まで知られることが少かつたのであるが、これ以外にもまだ存在するであらう。若し御存知の方があつたら何卒御教へを願ひたい。兎に角、明治改曆までには、このやうにそれを受入れるだけの素地が一般人の間に相當に出来上つてゐたと言ふべきで、明治五年に至つて全く新奇な事柄が忽然と起つたと考へるのは、恐らく正しい歴史的な観方ではあるまいと思はれる。